

図書館には天使がいる。

社会福祉学科教授

瀧澤 透

タキザワ トオル

「ベルリン・天使の詩」という映画には印象的な図書館のシーンがある。静寂の中で勉強や読書に励む利用者—小学生から高齢者まで—に天使が寄り添うシーンだ。天使はロングコートを着ていて人間とそっくりな姿をしている。そして人間の心の声を聴くことができる。もちろん人間には天使が見えない。触れられていることもわからない。天使は学生の横に座り、肩にそっと手を乗せたりノートをのぞき込んだりする。ただ心の声に耳を傾げるだけで人生には決して関与しない。天使は人間を見守るだけだ。

映画「ベルリン・天使の詩（原題 Der Himmel über Berlin）」は、ベルリンの壁が崩壊する前の1987年にヴィム・ヴェンダース監督によって製作された。この映画は、どんよりとした都会のビル群やアウトバーンなど西ベルリン市街の空撮から始まる。冒頭は主人公の男性天使しか登場しない。監督が好む長回しの映像は天使の視点となっていた。空から見た大都会はやがて、マンションの窓から人々の生活の中へと入っていく。主人公の天使には、街に暮らす人間の様々な心の声—小さな悩み、不満、後悔、絶望—が聴こえてくる。

ところが図書館のシーンになると一変する。急にたくさんの天使が登場するのだ。女性や青年、壮年などの姿をした天使たちが、図書館の中でお互いに挨拶をしたりアイコンタクトを取っていた。図書館は明らかに天使の居場所となっていた。そして天使たちは熱心に勉強している利用者に近づき、心の声をそっと聴いていた。天使は皆、嬉しそうだった。この映画では「天使は図書館で勉強に励む者が大好きである」と、はっきり描写されていたのだ。

私は青森県立保健大学の図書館で一生懸命に勉強をしている学生を見かけると、「天使が横にいるのではないか」と時々考えることがある。「課題学習も試験勉強も、国試対策も卒業研究も、勉学に努力する学生は皆、天使に見守られているのだ」と私は今でも少し信じている。

